

第48回新潟県母親大会「五日制が始まって」分科会より

五日制が提起している問題とは

高橋 武昌

一、子どもと教職員を追いたてているものは？

・研修の時間がとれず、子どもを放課後早々に帰して時間を確保している。

・部活がやりにくくなっていて、昨年より時間が足りない。

・学校体制が変わったこともあって教職員はもの言えず、職員会議が連絡会になった。中間管理層（的な立場の人）がその雰囲気を増幅させている。

・宿題が増えて三年の子が、「おれを殺す気か」とまで言う。

・地域のひまわりクラブだが、クラブに帰るとねむる子が目立つ。宿題ドリルが多いことも目立つ。

やはり、学力低下論が学校を窮屈にしている。文科省の「基礎基本の重視」の方針は、子どもの学習を再び面白さのない鍛練にする恐れがある。そんなことを感じさせる発言が続いた。

二、新指導要領の「ゆとり」を分析してみると

・幼児期の体験にも係わるのか、子どもが字を書けなくなっている。大きく子どもが変わったと思った。子どもと私の指導がかみ合わず学力がつかない。

・総合学習は、学校を多忙にしている。中学校ではそれに選択教科も加わって子どもを追いまくる状況になっている。



・少人数授業（三年以上六年まで）は益々すすみ集団の形ができたと思うとバラバラになり、習熟度別では上の子より下の子がダメになっていくようだ。そうすると、そのダメになっていく子の居場所まで奪われていく。

・習熟度別のクラスをとんこつラーメン、ふつうのラーメンとか言って振り分けている人間関係の壊れていく状況を親として感じている。

・絶対評価が入ってくるが、態度点も加えて小テストを繰り返していく。子どもが成長していくための内容とは一体何か考えさせられる。

・低学力論と学校不信論を前面にだして受験産業がいっそう繁盛している。

五日制の下で各学校が「ゆとり」の中で…と新指導要領はうたっているが、様々な新教育体制（総合学習・選択制度・絶対評価・少人数授業など）は、「ゆとり」を奪い「生きる力」をはぐくむ教育になっていない、と言う発言が目立った。現状を批判することは大変重要だが、同時に「彼岸」にあるべき子ども像・学校像が見えてくる論議が必要になっている。

三、母親大会に結集する自覚的女性たち

・英才教育をとる母が身近かにいる。この方は自律神経が失調していると自ら言っていますが、今の学校の状況は、母親たちをこのように追い詰めている。実際その方はそのように見える。

・五日制とは本来私たちが求めてきたものではないのか。だが土曜日の分も月々金で働いている。何としても目先のことに流されないようにしていきたい。

・N町だが保健センターが中心となり老人と小中学生の交流をすすめる、六年生など生き生きとしている。

・M町では、公民館がボランティアを募集して地域の子どもへの受け皿をつくっているが何しろ足りない。

ひまわりクラブの実践も楽しく聞いた。教師たちも、安心してゆったりと過ごせるあたりの学校づくりの視点を提起する時期に来ている。自覚的な女性達を核にしなが、新たな関係と様々な教育づくりの試みが始まる予感を感じたのは私一人ではない。

（たかはし たけまさ）